

二柱の天照大神と饒速日尊

ノアとナオの方舟はこぶね 世界統一の神業（中編）

出口 恒

『旧約聖書』の冒頭、ギリシヤ文字のA・α（アルファ）に当たる創世記冒頭で、神が七日間で世界を創り、楽園にアダムとイブを住ませたが、彼らが蛇の誘惑によって禁断の知恵（善悪の知識）の樹の実を食したので、エデンの楽園を追放されたという、神による天地創造と人間の墮落が語られる創世記一―三）。

わたし（神ヤハウエ）はアルファであり、オメガである。最初の者であり、最後の者である。初めてあり、終りである。ヨハネの黙示録二十二章―十三）。ヨハネ黙示録は『新約聖書』の最後に配置されたΩ（オメガ）の書。終り

が初めということ、主神は初めもなく終りもない「永遠」の神であることを示します。二十二

章は王仁の吉数。ωとαの字形字体が、横にωαωαωαとそれを繰り返すことで永遠のループを暗示。

神モーゼに言ひたまひけるは、我は「在りて在る者」「永遠の存在」なり。汝かくイスラエルの子孫に言ふべし。我在り、といふ者、我を汝らに遣はしたまふと

（「第三章」「出エジプト記」）。

五十音図の「あ」と「ん」はアルファ、オメガに相当し、私見ですがひらがなの「あ」の文字は神を示す十字架「十」と「α」「ん」

の文字は「ω」。全体が主神天御中主神・エホバの在りところ。またサンスクリット語を生んだインドでは阿吽・AUM（聖音）に相当します。阿吽は神社の二頭の狛犬の開いた口と閉じた口が表象。皇室とイスラエルにからむ秘密があります。

アは素盞鳴尊の御本霊、主神は瑞御魂神素盞鳴大神（「総説」「靈界物語」四十七卷二章）。

またアルファのAは牛の頭を逆に描いた象形文字。牛頭天王とされる、A（A）の言霊、神素盞鳴尊を示すのでしょうか。

そして「エホバ」というのはヘブ

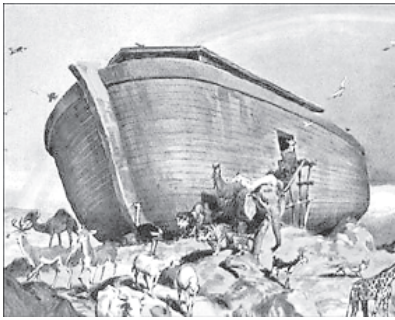
ルー語で、昔も在り、今も在り、又将来も在る所の根本の神、宇宙の本体という意義である。して見れば取りも直さず日本民族が太古に於て天御中主神とたたえた神を指すに外ならぬので、

我等が為めには、極めて大切な国祖である事が判るのである」

（「信仰の墮落」「神霊界」）。

創世記のノアの方舟

ヤハウエ（エホバ）は地上に増えた人々が悪を行っているのを見て、天使アルスヤルユルを呼び、大洪水で地上の全てが滅びるが「ヤハウエに従う無垢な人」であつたノアとその家族のみは生き延びさせるよう指示した。アルスヤルユルはノアに方舟の建設を命じた。ノアは五百歳で息子セム、ハム、ヤペテ（ヤフェト）をもうけた。ノアとその家族八人は一所懸命働き、その間、ノアは伝道して、大洪水が来ることを人々に知らせたが、誰も耳を傾けない。箱舟はゴフェルの木製で、三階建てで内部に多くの小部屋。ノアは箱舟



ノアの方舟

を完成させると、家族とその妻子、すべての動物のつがい装箱舟に乗せた。洪水は四十日四十七夜続き地上に生きていたものを滅ぼしつくす。水は百五十日の間、地上で勢いを失わず、その後、箱舟はアララト山の上に。四十日のあとノアは鴉からすを放つたが、とまるところがなく帰ってきた。さらに鳩を放したが戻ってきた。七日後、もう一度鳩を放すと、鳩はオリーブの葉をくわえて船に。さらに七日たつて鳩を放す

と、鳩はもう戻ってこなかった。ノアは水が引いたことを知り、家族と動物たちと共に箱舟を出て祭壇を築き、焼き尽くす生け贄にえを神に捧げた。

神はこれを祝福し、ノアとその息子たちと後の子孫たち、そして地上の全ての肉なるものに対し、全ての生きとし生ける物を絶滅させてしまうような大洪水は、決して起こさない事を契約。その契約の証として、空に虹をかけた(『旧約聖書』「創世記」。「船」という文字は舟偏に八口、つまりノアの家族八人を示すと読めます。

さて、聖書創世記ノアの方舟の話の起源はシュメール人が残した粘土板に記された『ギルガメシュ叙事詩』と考えられます。世界最古の文明・メソポタミア文明を作り上げたのが民族系統

不明とされ、日本民族と共通要素の多いシュメール人で、ノアの方舟の話とほぼ同じ話が伝わっています。霊界物語の顕恩郷はシュメール文明発祥の地、日本と同じ、豊葦原瑞穂国中津国のメソポタミアにあり、ノアの方舟に相応する話は梅の第五巻、王仁にちなむ二十二章、二百二十二章目の「神示の方舟」の章に示されています。そこでの神示の方舟は、瑞霊にちなむ三三三艘です。降雨五六七日。

ノアの洪水と云ふ事がある、ノは水の言霊、アは天の言霊、ノア(水天)は即ち水高しの意であり又水余ると云ふ意味にてノア即ち洪水である(「音頭と言霊」『月鏡』)。

ノアとナオの方舟
ノアの言霊「ナ」と反り、ナオ

の言霊「ノ」と反る、「ノア」と「ナオ」との方舟の、真中に住みきるスの御霊、すめら御国のすがた也(「いろは歌」大正六年十一月三日記)。

五十音のアからノまでを図1のように五文字ずつ区切って配列すると、二十五声の正方形、方舟の型を成す。それぞれの行と列は世界の五大州を表す。左は天火結水地を示す。

ノアとナオの方舟 図1

天	士	タ	サ	カ	ア	アジア
火	ニ	チ	シ	キ	イ	アフリカ
結	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	アフリカ
水	ネ	テ	セ	ウ	エ	ヨーロッパ
地	フ	ト	ソ	コ	オ	オーストラリア
	豪	欧	阿	米	亜	

天主天之御中主神

初めに言葉ありき、言葉は神と共にありき、言葉は神なりき

『新約聖書』『ヨハネによる福音書 第一章』。創世は神の言葉

(「ロ、ゴス」) からはじまりました。

天地初めて発けし時、高天原

に成れる神の名は、天之御中主

神、次に高御産巢日神、次に神

産巢日神。此の三柱の神は並独

神と成り坐して、身を隠したま

ひき『古事記』上巻冒頭)。大宇

宙の中心に天之御中主神が坐

し、その神から現れた二柱の神

が「結び」の働きをします。大宇

宙に「タ・カ・ア・マ・ハ・ラに

鳴れる」神は、天之御中主神「天

主」と略すると、それはギリシヤ

神話の天空神、ゼウス(ローマ神

話ジュピター)。天主教とは中国

ローマ・カトリック教会の呼名。

神は天主と書いたのは、キリ

スト教が来ても名は違っても同

じ神様だから判りやすいように

説明しなくともよいように書い

た(「天主」『新月の光』下巻)。

大正六年十一月三日の神歌

「いろは歌」に記された「ノアと

ナオの方舟」につき、父出口

和明の発見を引用しながら、考

え方を次号も含めて展開します。

「ロ、ゴス」すなわち言葉の終わ

りと始めを結ぶと「ノア」、言霊

学上霊返し(たまかえ)の法則によると、ノ

アの言霊は「ナオ」に返る。二十

五声の言霊は「ノア」であり「ナ

オ」となる方舟をつくる。「ノ・

ア」と「ナ・オ」の交差点が「ス」、

「ス」は言霊学上、◎。この世の

太初の言霊であり、七十五声が

おさまる時また、◎の一声に

帰す。◎は天地いっさいを統べ

たまう主神を顕す。◎の言霊を

正中に納めた、このノアとナオ

の救いの方舟は大本の権威を証
明する一例として大正六年以来
語り継がれました。

さて、大宇宙の中心神、天主は

天之御中主神です。アルファ

ベットで「ス・◎」に当る文字を

探してみました。シータは、

「TH」で「ス」に近い清音、形

が聖師の拇印(ぼいん)スに近い。冥想時

シータ波が出るように文字自体

が「魂」を示すとの説があります。

大化の改新とユダヤ起源

西歴六百四十五年に起きたと

される大化の改新は旧歴七月一

日に始まりました。ユダヤ歴政

歴)で同日は新年祭。大化政府が

旧歴七月十四日に神々に捧げる

捧げ物を集めたとの記録があり、

ユダヤ歴の仮庵(かいは)の祭りがグレゴ

リオ歴七月十四日夕方からであ

ること、奴隷の子の帰属、土地の

分配、親族の死に際しての断髪

の禁止、借り物に関する賠償な

どが『旧約聖書』レビ記』出エ

ジプト記』の内容とほぼ同じ。大

化という言葉は、ヘブライ語の

「希望」の発音と似ていますヨセ

フ・アイゼルバーク』日本書紀と

日本語のユダヤ起源(徳間書店)。

大化は日本最初の元号であり、

大化の改新という政治改革は、

天皇の宮を飛鳥から難波宮に移

し、飛鳥の豪族を中心とした政

治から、天皇を掲げる律令国家

への結節点となった事件です。

天主思想は、この頃には確立し

ていたのではないかと思います。

イエスはスクウ

方舟図2で、ア行のイとエの

言霊が中央のス神と合して二等

辺三角形を形作り、宇宙に鳴り

渡ります。

二等辺三角形を貫きスクウの三声。イエスという言葉は癒すという事となり、精神的・肉体的病いも癒します(「出口王仁三郎氏を囲む座談会」『昭和青年』)。

図2で、◎を中心に抱えてテクチ(出口)の三声を結べば、二等辺三角形。中の文字は「尽クス」。ちなみに図3で「チシキ」と

結ぶと、「死ス」。ス神に発しない、エデンの知識(知恵)の樹は

ノアとナオの方舟 図2

天	ナ	タ	サ	カ	ア	アジア
火	ニ	チ	シ	キ	イ	アメリカ
結	ヌ	ソ	ク	ウ	エ	アフリカ
水	ネ	セ	ケ	エ	オ	エウロッパ*
地	ノ	ト	ソ	コ	オ	オーストラリア
	豪	欧*	阿	米	亜	

「死ス」でしょうか。さらにナオの言葉をアに反して合わせると、「アナオ」。五大州の上半分を救う大三角形。穴太は聖師生誕の地であり、神・幽・顕界の秘奥を探つて救世の神示を得た高熊山の地です。

素盞鳴命の千座の置戸、オリオン

図4で、◎の神が天に駆け上つてサとなり、地に下つてノ

ノアとナオの方舟 図3

天	ナ	タ	サ	カ	ア	アジア
火	ニ	チ	シ	キ	イ	アメリカ
結	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	アフリカ
水	ネ	テ	セ	ケ	エ	エウロッパ*
地	ノ	ト	ソ	コ	オ	オーストラリア
	豪	欧*	阿	米	亜	

ノアとナオの方舟 図4

霊界物語の口述台(ノアの方舟)

天	ナ	タ	サ	カ	ア	五大陸	支配者/祖先	胞衣(えな)
火	ニ	チ	シ	キ	イ	アジア	正勝吾勝命	本州
結	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	アメリカ	熊野久須毘命	台湾、北海道
水	ネ	テ	セ	ケ	エ	アフリカ	活津日子根命	九州
地	ノ	ト	ソ	コ	オ	エウロッパ*	天津日子根命	本州
						オーストラリア	天之菩卑命	四国
いきをて んとちに むすぶ	オース トラ リア	エウ ロッパ*	アフリ カ	アフリ カ	アジ ア	アの言葉スサノオから生まれた五男神。五大陸の名前は、ア行で始まり、母音Aで終わる。魂返しにより全て「ア」のスサノオに返る。		

からオまで一文字に開いていく姿。ス・サ・ノ・オを主神を要に結んでいけば、大地に踏ん張つて立つ囚の字、素盞鳴命の千座の置戸であり、王仁三郎聖師の宿命を負うオリオン星座の姿

(「出口和明」出口王仁三郎なおの「預言確言」みいづ舎)。

かくて苦闘四十年、狂瀾怒涛の真只中にノアの方舟を漕いで来た余は、その方舟にはひ上つて来る人々の種々雑多な思想や信仰に又悩み続けねばならなかった(「回顧四十年」『神聖』)。

此世を救ふキリストの 神業清くミロク神 十字の架を背に負ひて ノアの方舟操りつ 天教地教の山の上に 世人を救ふ神の業(「握手の涙」『霊界物語』二十五卷十三章)。

方舟は口述台の又の御名(「霊界物語」五十九卷二十二章)。

キリストは、最後の審判を為すために再臨すると云つたが、彼の最後の審判と云ふのは、火洗礼を施す事。……火洗礼とは、人間を霊的に救済する事である。最後の審判は天国に入り得るも

のと、地獄に陥落するものとの標準を示される事。此標準を示されて後、各自はその自由意志によつて自ら選んで天国に入り、或は自ら進んで地獄におつる、そは各自の意志想念の如何による。標準とは何か、靈界物語によつて示されつつある神示のもの。故に最後の審判は、大正十年十月より、既に開かれて居るのである。

バイブルに「又天国の此福音を万民に證せん爲めに普く天下に宣べ伝へられん。然る後末期いたるべし」とある如く、大正十二年より、支那、朝鮮の順序を経て、今や全世界にこの福音が宣べ伝へられつつある……（『靈界物語は最後の審判書なり』水鏡）。ノアの方舟とは『靈界物語』の神示を示す口述台であり、最後の審判とは『靈界物語』に示され

つつある神示そのものです。大正十年新十月二十日は本宮山神殿取り壊し開始日であり、『靈界物語』第一巻、序』を出口王仁三郎聖師が記した日、その日は切り紙神示で示され、その日から本格的に最後の審判は開かれています。このノアの方舟が最後の審判を示す口述台ならば、聖師は人類の未来に対してノアとナオの方舟上にも示唆を残されているはずす。

【ス】と【フ】と【ヨ】との大戦ひ 太古、世界には三大民族があつた。即ちセム族、ハム族、ヤヘット族。セムの言靈はスとなり、ハムの言靈はフとなり、ヤヘットの言靈はヨとなる。故にスの言靈に該当する民族が、神の選民と云ふことになり、日本人、朝鮮人、満洲人、蒙古人、コー

カス人等である。ユダヤ人もセム族に属する。次がハム族で支那人、印度人又は小亜細亜やヨーロッパの一部に居る民族である。ヨの民族即ちヤヘット族と云ふのはアフリカ等に居る黒人族である。現在は各民族共に悉く混血して居るのであつて、日本人の中にもハム族等の血が多数に混入して居る。又欧米人の中にはハム族とヤヘット族とが混血したのがある。イスラエルの流れと云ふことがあるが、イは発声音でスラエの言靈はセとなるが故にイセ（伊勢）の流れと云ふことになる、即ちセム族の事である「三大民族」玉鏡。【ス】と【フ】と【ヨ】との大戦ひはこれからであるぞよ。一旦は【フ】と【ヨ】の天下と成る所まで行くなれど、ナノ御魂とノの御魂の和合一致が出来て、

【ス】の御魂が統一することに成るぞよ、「神諭」神靈界』大正八年五月十五日号）。ナノ御魂とはノア・即ち聖師の御魂、ノの御魂とは、ナオの御魂。その和合とは大正五年の神島開きでしょうか。【ス】の御魂が統一とは、セム族 ユダヤを含む）、そして素盞鳴命による世界統一を示すものと考えます。

ノアの方舟を操る

出口王仁三郎聖師

ハムの一族悉く 顕恩郷を中心に 婆羅門教を開きけるセムの流裔と聞えたる コーカス山の神人は 婆羅門教を言向けて 誠の道を開かむと……（『保食神』靈界物語』十一卷二十三章）。コーカス山の神人とは素盞鳴命。セム族は素盞鳴命の系統で

あり、その継承者が神の民ノア。セム族、ハム族、ヤヘット族はすべてノアの子孫。その聖師がノアの方舟を漕いできたという。

そして吾勝命^{あかつのみこと}を初めとする素盞鳴命の五男神は五大洲の人類の先祖になったとされます（『五男神は五大洲の先祖』新月の光』上巻）。

しかし全世界を覆う大地殻変動などにより、素盞鳴命の系統であるノアがヤハウェ（エホバ）の指示で方舟をつくり、地殻変動を生きのび、ノアの直系であるセム族やバラモンの系統となるハム族、そしてヤヘット族が二度目の人類の先祖となった。セム族はスファラディユダヤ人や日本人。

ノアが素盞鳴命の系統であるということは、ヤハウェ（エホバ）「在りて在る者」は神素盞鳴



謎の古代石カブレラストーン

大神であることを示しています。ノアの洪水は、聖書により紀元前二三七〇年頃にあったとの見解があり、またトルコのアララト山に漂着した方舟の化石が発見されたとの報告がなされています。それはカブレラストーン。一九六一年、ペルー！アンデス地方を大豪雨が襲い、付近を流れるイカ川が反乱。砂漠の砂が下流へ押し流され、奇妙な石が周辺から発見されるように。その石

には約六五〇〇万年前に絶滅したとされる恐竜と、約五〇〇万年前に出現したとされる猿人が共存する光景が描かれていた。この絵が一万年以上前に書かれていること（考古学者フェルナンド・ラス・カサス博士分析）。武器を持った人間が恐竜と戦っている絵があること。

出口氏、鰻^{うなぎ}は河の龍なり、馬は地の龍であり、鯨は海の龍である。こういうものを、総合して、想像して書いたものが今の抽象的な絵画の龍やけれども、本当の龍というものはあんなに長い胴体をもっているものやない。今のイモリのよくなもので、あのもっと大きな奴や。昔は全世界に居^おった。今でもたまに巨龍の骨というのが出て来るやろう。それらはみんなノアの洪水で死んで

しまったのや。それでノアの洪水というものは一地方の洪水というものがあるけれども、地層を考えてみるがええ。あれを見ると地方全部が一遍、泥海になっておらんのかなや……」

細田「亜炭^{あたん}などは草などがなったのでしょうか」

出口氏、皆どうや、そういうものが固まっている。それがまだ一万年くらいせんと石炭にならず、亜炭という奴や。その亜炭が一万年せんと本当の石炭にならぬ」音頭と言霊』月鏡』。人類と恐竜は同時代に存在し、人類はノアの洪水を生きのび石炭や亜炭が存在するということは、ノアの方舟が登場してから、一万年前後経ったことを示唆されています。

次号へ続く。